

選考をふりかえって

「小説部門」 高校生の部 選考長 小川洋子

小説を書くというのは、無の状態から一つの世界を作り上げてゆくことです。どんなに道具が発達しても、一字一字しか前進できません。根気のいる地道な作業です。だからこそ出来上がった小説には、書き手の体温が染み込んでいます。その温もりに導かれ、読者はそこにしか存在しない唯一の世界を旅できるのです。

毎年、高校生たちの作品を読んでいると必ず、小説の良さを改めてかみしめることができます。この文学賞は私にとって選考の場というよりは、小説について深く考える場となっています。

最優秀賞、吉川結衣さんの「ブラジル人のミラクルピラ配り」は、和食店でのアルバイトが、思いがけず地球規模の体験へと広がってゆくさまが印象的でした。何より、道路を扶んだお店の位置関係の使い方が光っています。ほんのひとときの触れ合いにもかかわらず、登場人物たちの豊かな人間性が伝わってきます。ブラジル料理店のチラシを大切に受け取る、主人公の思いやりがこの作品の根底を支えています。

赤い夕陽が、地球を優しく照らしていた。

こんなさり気ない一行に感動できる小説でした。

優秀賞、中田結菜さんの「名のない旅」は、まさに名前のない世界を見事に構築しています。抑制のきいた文章が、かえって僕と少女の出会いを特別なものにしていました。独特の余韻を持った、忘れたい作品です。

もう一つの優秀賞、鎌田陽都さんの「木天蓼、また旅」は、他の作品にはないリズムとおかしさがありました。特に会話の文体が秀逸です。猫の視点を通して、海の不思議と美しさが表現されているところや、涙をこぼす飼い主に、すり寄ってやりたいと思うところ、そして佐助の本当の姿が明らかになるラスト、など、心に残る場面がいくつもありました。